恵みとあわれみの冠

岡田俊子

『主の打たれた傷のゆえに、あなたがたはいやされた。』（Ⅰペテロ二・24）

昨年の十二月九日に、それまで病気知らずであった夫が後腹膜腫瘍と診断され、約六時間の大手術をすることになりました。夫も私も信仰が試され、聖書に書いてあるとおり、必ず主は癒してくださると堅く信ずること、そのことから揺れないでいることの訓練をうけました。しかし、時にはぐらつき疲れてきました。その時に家族の一致と、とりなし手達の祈りが、モーセの腕をアロンが支えたように、私の腕を落ちないように支えてくれていました。

主は真実な方です。その間に、次々と奇跡としか思えないことをおこしてくださり、肉体がいやされ、最も願っていた、魂の刷新をしてくださいました。

それから、私達にさらなる確信が与えられることがおきてきました。夫の体がほぼ回復して、日常の生活が落ち着いてきた四月二十九日に、私の運転していた普通車が四輪駆動の大型車と衝突し、車が大破してしまいました。しかし、私達は天使がふわっと抱きかか

えてくれたような感覚で、なにごともなかったかのように全くの無傷でした。『主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り彼らを助け出される（詩篇三四・7）』。車のぶつかっている箇所が約五十センチずれていたら、運転席にいた私の命はどうなっているかわからないと言われたような大事故でした。

こうして、またも奇跡を経験しました。

その後深い泉から湧き上がるように、御言葉が私の内から響いてきました。

『あなたのいのちを穴から贖い、あなたに恵みとあわれみの冠をかぶらせ』（詩篇一〇三・4）

人間はちりに過ぎない、野に生えている草のような命であり（詩篇一〇三・15）、夫と私の命一つずつを穴から引き上げてくださることによって、日々ただ、恵みとあわれみで生かされているのみであることを鈍感な心に体験を通して分からせていただいたと信じています。